6

超言葉

一つの意味を伝えるのではなく、曖昧さを伝える言葉の方へ

渡辺 哲男
WATANABE Tetsuo
立教大学／文学部教育学科／教授

日常の「詩的な言葉」を取り上げ、ことばの曖昧性や多義性の中にある言外の豊かな世界を概観するとともに、こうした言葉の遣り取りの面白さとことばが秘める無限の可能性について、その一端を垣間見る。

事象から感受するメッセージ

初めて赴く地に向かって歩いている道中、ある鬱蒼とした森に入ったとき、ササーッと風が吹いて葉っぱが目の前を舞っていったとしましょう。そのとき、この事象をどのように意味づけるでしょうか。その経験そのもの、すなわち、「葉っぱが目の前を舞った」以上の意味を見出さないでしょうか。もちろん、そういう場合もあるでしょう。けれども、人によっては、「あっ、この場所は自分を歓迎してくれている」というように、風の音を、この地が自分を歓迎してくれているというように意味づけようとする場合もあるでしょう。あるいは、この風の音を「ここに来るなと言ってるな」というように、自分がこの地に歓迎されていないメッセージだと意味づける場合もあるでしょう。

このように、私たちは、モノやコトから言語的なメッセージを感受することがあります。こう言われると、少し「スピリチュアル」な内容を想像されるかも知れませんが、ここで言いたいことは少し違います。歓迎されているにせよ、歓迎されていないにせよ、葉っぱが舞う光景からそれらのメッセージを感じ取るということは、現象として顕れている当該の光景の奥底（裏側）に、言語的な意味を見出そうとする営為であるということになります。または、その光景は、何かの「比喩」であるというように考える、ということになるでしょう。

鬱蒼とした森

葉っぱが舞う

言葉がもつ機能

それでは、私たちがこうしたメッセージを感受できるのはなぜでしょうか。それは、私たちが「言葉の使い手」であるからです。ササーッと、葉っぱが風に舞っていく、初めて入った森のざわめきという、何だかよく分からないことを、私たちは、恐らくその時の自分の心持ちにも影響されながら、「歓迎されている」または「歓迎されていない」というように、ひとまず確定させているわけです。それは、わけの分からないことを、言葉によって意味づけているということですから、言葉なしにはできないのです。

これは、言葉がもつ重要な機能の一つと言えます。けれども、私たちは言葉をもってしまったがゆえに、大事なことを忘れてしまいがちです。それは、「モノやコトの意味は言葉によって確定させられる」と自明視してしまうことです。森のざわめきから私たちが感受するのは、「歓迎されている／されていない」という単純な二項図式で分けられるものではなく、初めて当地に入る私たちの期待と不安がないまぜになった、どちらとも言えないものであることもあります。私たちは、言葉をもっているがゆえに、どちらかに決めてしまいたがるのですが、実はそう簡単には決められない（決めない方がよい）こともあります。

言葉は、「何だかよく分からないもの」を一刀両断して、ひとまず「分かる」ようにしてくれます。ですが、鮮やかに両断するので、単純化してしまい、微妙なニュアンスが見落とされてしまうこともあります。私たちはこのことをよく理解して、言葉の一流の使い手になることが必要です。そうでないと、私

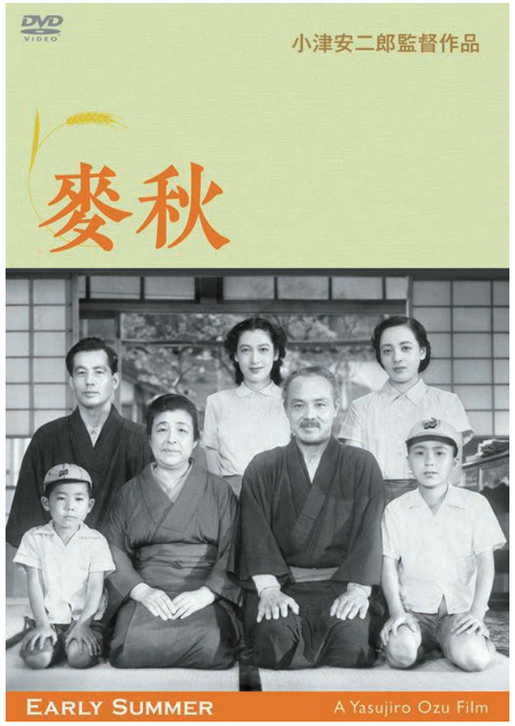
かがみもち

たちは、ただ、分かりやすいものや、単純なもの、または論理的なものこそが素晴らしいのだと考えてしまうことになります。ならば、単純化されたがゆえに見落とされたものをどう見つけていけばよいでしょうか。

言葉が抱えた限界を超えて

突然ですが、私の授業で、俳句を創作するレッスンをしたことがあります。その時、ある学生が、「お正月　母のかかとは　かがみもち」という俳句を詠みました。この句をどう解釈するでしょうか。私は、「かがみもち」が絶妙だと思いました。すなわち、この学生は、「かがみもち」の表面の見た目のザラザラ感と、母親の乾燥したかかとのカサカサ感を重ね合わせたわけです。そうすると、この学生が、母親に「かかともう少し手入れしてよ」と思っている、ある種のからかいのようなもの、他方で、手入れされないままのかかとをみて、母親の多忙ぶりを少し心配しているようなところもあり、そうしたどちらともとれない、一つの意味には決められない、母親に対する言語化しがたい思いが感じられます。

言葉を使いつつも、ある意味に定められないことを表現したというところに、この俳句の何ともいえない面白さがあるわけです。例えば、ある人のことを「好き」か「嫌い」か、実はこうした単純な図式では割り切れません。いま、この割り切れなさを示す具体例として俳句を挙げましたが、このような、言葉を使いながら、言葉が抱えた限界を超えていこうとする営為は、詩や俳句を制作するときだけ特別にしていることではありません。言葉にし難いことを言葉にしようとするとき、私たちは思いもよらないこと（わけが分からないこと）を言ったり書いたりすることがありますし、そうした言葉の聴き手や読み手は、相手の言葉を「意味が分からない」と切り捨てるのではなく、その「分からなさ」を楽しみ（誤解を抱えたままコミュニケーションが続くこともある）、あるいはそうした言葉を用いた相手の心持ちを想像することが必要です。



映画『麦秋』DVD表紙（©1951/2016 松竹株式会社）

とっさの言動

こうした、日常の「詩的な言葉」の遣り取りがなされているケースとして、ここでは、少し古い映画ですが、小津安二郎監督の『麦秋』（1951年）の一場面を紹介しておきましょう。演劇（の台詞）は、ときに日常であり得ることを露わにしてくれることがあります。

北鎌倉で、父母、医師をしている兄一家と暮らす会社員の長女・間宮紀子（原節子）は、30歳少し手前ですが独身で、そのことを周囲も気にしていました。そんな折、あるところから縁談が持ち込まれ、紀子も見たところ乗り気で、順調に推移しているようにみえます。このことは、兄の同僚であり、戦死した次兄の友人である（紀子とも顔なじみ）矢部謙吉（二本柳寛）にも伝わります。矢部は少し前に妻を亡くしており、矢部の母、たみ（杉村春子）が再婚相手を探しているところでした。

アンパン

矢部は秋田の病院に転院することになり、出発前夜に紀子が矢部家を訪ねるのですが、その時在宅していたたみは、冗談だと前置きしながら、紀子に、実はあなたのような人に嫁に来て欲しかったと伝えます。たみから不意に「プロポーズ」された紀子でしたが、紀子は、自分でよかったら、とその場で承諾してしまいます。「ああ嬉しい！」と、予想だにしない展開に高揚するたみは、思わず紀子に「パン食べない？ アンパン」と発してしまうのです。

喜びや驚き、さらには密かに願い続けてきたことが成就して胸をなで下ろすなどといった、色々な思いが混淆した状況のなかで、唐突に脈絡なく登場する「アンパン」は、意味不明です。なぜアンパンを食べないかと誘う必要があるのでしょう。まさしくこれは映画というフィクションの中の遣り取りと断じてしまうこともできます。しかし、思いもよらず願いが叶ってもうどうしたらよいか分からないといったとき、とっさにわけの分からない言動をしてしまうことは日常でもありますし、「アンパン」という台詞に接した私たちは、映画監督の濱口竜介が分析するように、この台詞を「杉村演ずる母親が『全き安心』に達した証しとして意味づける」[1]わけです。

曖昧さを伝える

今日の学校では、できるだけ誰にでも分かる言葉で、効率的にコミュニケーションをとることを前提として、言葉の学びが行われているように思います。詩や俳句といった、いわゆる「詩的な言葉」は、特別に使う言葉として位置づけられているように思われますが、そうではなく、日常の会話の中でも使われているし、そうした、一見遠回りで、分かりづらいこともあるかもしれない、「詩的な言葉」の遣り取りの面白さを知り、こうした言葉をも自在に使えると、私たちの世界はさらに豊かにみえてくるはずです。

言葉は単一の意味を伝えるのではなく、話者同士の言葉の遣り取りによって生まれる曖昧さを伝えるものだと考えてみませんか。

注1）濱口竜介「アンパン」早川書房『悲劇喜劇』No.802、2020年1月、39頁。

今日の学校